

商を要求してきました。レザノフは、先に幕府からラクスマンに与えられた信牌を持つてきました。そして、通商を許可してもらおうという気持ちを抱いて長崎へ来航したのでした。

しかし、次の年に幕府からロシア側へ通商を断るということが伝えられました。ロシア人の乱暴はそれに関連して起きたことでした。

黒石八代領主津軽親足の時代に入つて間もない文化三年（一八〇六）九月、レザノフの部下フウオストフらは、サワリン南部のクシユンコタンに上陸して米や酒を略奪したり交易地などの施設や岡合船（小型の運送船）などをことごとく焼き払いました。また、そこにいた番人を四人も捕えていました。

ロシアの襲撃はさらに続きました。文化四年（一八〇七）四月、フウオストフらは、捉島のナイボを襲い、番人を捕え、食料を奪い、番屋などを焼き払いました。

続いて、エトロフの中心であるシヤナに二度にわたつて上陸し、そこを守っている弘前藩と南部藩の兵を撃退し、食料・武器を奪い、会所・倉庫など焼き払いました。そのあと、ロシア船は、ウルツブ島に寄港したのち、

サワリンからリイシリ（北海道利尻郡利尻町）に向かい、番屋などを襲撃しながら、やがてオホーツクに帰つていきました。

このレザノフの来航から択捉島襲撃などの出来事は、幕府や東北の各藩だけではなく、領民も含めて異国船に対する注意を高めることとなりました。

そのようなありさまを見た幕府は、文化四年（一八〇七）三月、ついに松前・西蝦夷地も永久直轄地としました。これによつて松前・蝦夷地の全地域が幕府の直轄地になつたわけです。弘前藩も南部藩もこの段階ではつきりと永久警備を命じられています。

これら一連の事件の中で、文化四年（一八〇七）四月の弘前藩の出兵人数は一〇〇二人に膨れ上がりました。そして、文化五年には、勤番所の詰人（勤務する人の人数）を幕府から示されています。

※文化五年（一八〇八）十二月におこなわれた弘前藩の十万石の高直りは、この蝦夷地永久警備のはたらきが大きく影響したものと考えられます。

③

黒石津軽家の対応

文化三年（一八〇六）と文化四年（一八〇七）の、蝦夷地でのロシア人の乱暴の時には、黒石津軽家でも防備に気を配りました。
・文化三年には、異国船に備え、平内領狩場沢番所に足軽十人と武器を配りました。

・文化四年（一八〇七）異国船出没のため、平内領内御固方（平内領の警備を厳重にせよ）という幕府の命令が出されました。

文化四年に黒石陣屋では、出兵をするために用意する人数を百八十四人でよいかどうか、などについて本家の弘前藩に伺いを立てています。また、同年九月には、弘前藩から鉄砲二十挺、弓十張が黒石の方に届けられたので、それを用いて備えを整えました。

・文化五年（一八〇八）三月、江戸に居た黒石七代領主の津軽親足は、領内の平内海岸警固を指揮するため、そのころ幕府から命ぜられていた駿府加番（駿府城の警備を加勢する役）の役目を辞職して国許へ帰国しました。

四月二十七日、黒石に着きましたが、百人の大人数でやつてきましたので、これまでにはなかつたこととして地元ではとても驚きました。
黒石では、用人の唐牛平左衛門が中心になつて、平内へ出かける人数と

して武士の身分の者七十四人と小荷駄方（必要な荷物を運ぶ役目の者）そのほかを合わせて総勢八十四人整えました。親足は六月十日から十九日まで、黒石領の飛び地である平内領を海岸警固のために見まわっています。これら、蝦夷地警備や領内沿岸警備などに努めている弘前藩はたらきに、黒石津軽家としても、何らかの形で力を尽くしていくことが分かる活動だと思います。

④ 弘前藩の高直り

蝦夷地に近い弘前藩は、幕府からたびたび出兵の命が出され、これまで述べたように、北方警備について重要な役割を受け持つてそれを果たしてきました。

文化二年（一八〇五）五月、弘前藩九代藩主津軽寧親は、蝦夷地警固を担当した功績により、領知高四万六〇〇〇石が七万石に上昇する「高直り」の榮誉を幕府から受けました。

ただし、領地の広さはそのままで、家格（家の地位）だけの昇進でした。なおこの昇進は、箱館奉行から申し入れがあり、幕府の諸役が協議の結

果、決定したといわれます。

さらに幕府は、南部・弘前の兩藩に東西蝦夷地の永久警備を命じたことから、文化五年（一八〇八）十二月に入つて、南部藩（藩主—南部利敬）は二〇万石に、弘前藩（藩主—津軽寧親）は一〇万石という高直りを命じました。

幕府としては、両藩の領土を増やしたわけでもなく、石高に応じた軍役（軍人として勤務すること）を負担させたわけですが、両家としては家格が上がつたことになります。

幕府はそのときには、すでに従四位下であつた南部利敬を侍従に昇進させ、津軽寧親を従四位下に昇進させました。弘前藩（弘前津軽家）では、高直りで一〇万石となつたのですが、領地が増えたわけではなく、津軽郡のこれまで通りの領地の広さに変わりはありませんでした。しかし、藩祖為信を除いて、二代信枚の時代から、従五位下の官位が続いた津軽家にとって、二〇〇年ぶりの昇進でした。

四位ともなれば、江戸城内での控え之間がそれまでの柳之間（従五位の下の外様大名の席）から、大広間（徳川一門の一部と従四位下以上の外様大名の席）となり、城中の待遇もこれまでとは異なつてきます。また、世間の目も違つ

できます。

そういうことから、藩主や藩主の近くで仕える家臣たちにとつても、この上ない喜びごとがありました。

(二) 黒石藩の成立

① 幕府でおこなわれた協議
寧親が黒石領を藩に昇格させてほしいという願いをしたためた「御願書」を幕府に提出する以前に、次のようなことがありました。

※勘定奉行—江戸幕府の職名の一つ。老中の下に属し、金銭の出し入れをつかさどる勘定方の最高責任者である。財政全般や幕府が直接治めている領地の支配など担当した。

文化四年(一八〇七)四月、幕府勘定奉行柳生久通らが蝦夷地をどのようにして治めていったらよいのか、ということを相談した書付に、箱館(函館)・江差(北海道檜山郡江差町)を警備する者として、八戸藩(南部氏領)に加えて「黒石津軽家を大名に昇進させ、大名の資格で警備の任務を果たし

てもらおう。」といふ計画がみられました。

黒石津軽家の所領と生産物などもきちんと調べており、警備の仕事をおこなうことが出来る力を持つているとみなされて立案された計画でした。

前月の文化四年（一八〇七）三月に、松前・蝦夷地を直轄地としたばかりの幕府にとつて、黒石津軽家は蝦夷地を治めるために必要な存在であると考えられたことになります。

※ 将軍の家臣——大名・旗本・御家人

江戸時代、石高一万石以上の領地を幕府から与えられた藩主は大名と呼ばれた。大名の領地は「・・藩」と呼ばれた。石高一万石以下で、将軍に直接面会できる資格のある武士を旗本、手当も低く、将軍に面会する資格の無い武士を御家人と呼んだ。

② 寧親、幕府に「御願書」を提出

文化六年（一八〇九）三月二十七日、津軽寧親から幕府へ次のような「御願書」が出されました。

「文化五年（一八〇八）弘前津軽家は蝦夷地の警固を命ぜられ、十万石に

昇格しましたが、知行四千石で幕府寄合をしている分家の黒石津軽家も由緒深い家柄です。

※寄合——幕府で認められた家の地位の一つ・家格・家柄。

※蔵米——藩の米蔵に納められた年貢米で、家臣の俸禄として支給された。

本家に入る蔵米の内から六千石を足し与えて、表高を一万石の大名にすれば、蝦夷地の警固や領内の守りにも好都合であることから、黒石津軽家の昇格をお願いします。』

という内容でした。

本家の弘前津軽家にとつては、分家の黒石津軽家が大名になつた方が、蝦夷地警固の仕事や領内の沿岸警備の手配などについて、より好都合になるということを理由として出された御願書でした。

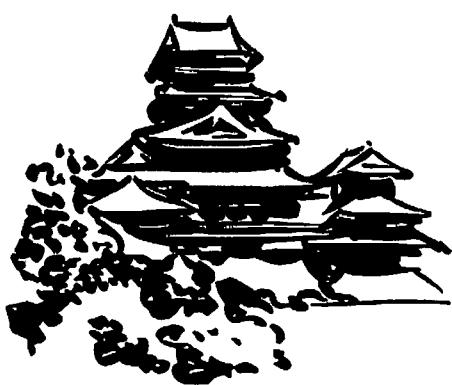
(3) 親足、幕府より一万石昇進の命を受ける

※老中——江戸幕府の役職の一つ。将軍に直接に属して政治をおこなつた幕府最高の職。代々徳川将軍家に仕えてきた大名のうち、二万五〇〇〇石以上の城主で

ある者から選ばれて任命された。一ヶ月交替の月番制で勤めをおこなつた。

文化六年（一八〇九）四月四日、幕府老中から津軽越中守寧親あてに、黒石領主の津軽三十郎（親足）と共に、江戸城へ来るようなどいう通知がありました。翌日の五日に両名が登城したところ、白書院縁側に案内されました。

そこには幕府の老中が居並んでいて、当番老中である青山下野守から「黒石津軽家の一万石昇進」と「柳の詰」が仰せ渡されました。



御名

黒石

津輕 千石

四千石

御名

末家

寄合

津輕三十郎

城度二千石
領中米束

多々一千石も、足石

改一、高並通御公

為わ勤役無頼

伊能、席柳間

可也

No.3 黒石津輕家 大名昇格許認狀

此の度 三十郎江 越中守藏米
を以つて壹万石之高に足石
致し 高並み之通り御奉公
相勤め為す度き旨願い之通り
之を仰せ付け被る 席之儀者柳之間江
罷り出づ可く候

四月五日

四月

以上のように、

石高四千石の津軽三十郎（親足）へ、津軽越中守寧親の蔵米六千石を足石して一万石とする。一万石の石高に沿つたご奉公を心がけていきたい、という願いの通り仰せつけます。

なお、江戸城に登城した際の席は、「柳の間」になるので、そこに入つてください。

というような意味が読み取れます。

明暦二年（一六五六）、黒石津軽家初代信英が五千石で分知して、弘前藩から分家しました。二代津軽信敏の時代は、黒石本家四千石・黒石分家一千石で五千石の領地でした。

しかし、三代領主津軽政児時代の元禄二年（一六八九）に、三代政児の弟信俗（黒石家の分家信純の養子伊織）の死によつて、黒石分家の千石が召し上げられてから、黒石領は代々四千石の石高になつていきました。

その石高に、本家弘前藩の蔵米から六千石の足石をされることによつて、

❖ 黒石津軽家は石高一万石の大名となり、黒石藩が成立したわけです。

※足石——不足な米を足し加え、石高をふやすこと。

同時に、大名になることにより、江戸城で勤める場も柳の間詰を申し渡されました。

その後、この仰せ渡されたことにもない、

❖ 黒石津軽家の家紋は、丸で囲んだ杏葉牡丹の五枚葉あつたのですが、文化六年（一八〇九）五月には、囲んである丸を付けなくともよい。という弘前本家の許可があつた。



No.4 黒石津軽家の家紋

❖ 黒石津軽家の家紋は、丸囲いを無くし、杏葉牡丹の片面が五枚葉である。

宗藩津軽家の家紋は、片面が七枚葉で、「津軽牡丹」として知られている。

❖ 七月には幕府より参勤交代を許される。

❖ 十二月には、親足が従五位下、甲斐守に任せられる。ということは続きました。

❖ 親足は、翌文化七年（一八一〇）一月に江戸に居る将軍家に御挨拶にあがり、盃（お酒）をいただき、時服（時節に合わせて着用する衣類）を与えられています。

そして、文化七年四月二十三日に江戸を出発し、途中で日光の廟（初代將軍徳川家康を祀っている所）に参拝し、五月十五日に黒石に到着しています。石高一万石の大名になつた黒石津軽家は、本家を助けて活動することになりました。

④ 黒石藩昇格への期待

「① 幕府でおこなわれた協議」で述べたように、文化四年（一八〇七）四月には、幕府勘定奉行らが蝦夷地の治め方を相談した際、箱館（函館）。江差（北海道檜山郡江差町）を警備する者として、八戸藩（南部藩）に加え、黒石津軽家を大名に昇進させてその務めを果たしてもらおうという計画がありました。

また、弘前藩主の寧親は文化六年（一八〇九）に、本家の弘前藩が六千石を足石するので、黒石津軽家を一万石の大名に取り立てて欲しい。そうなれば、蝦夷地警備や領内の沿岸警備をおこなう際に好都合であるという考え方を、幕府に提出した御願書に示しています。

これらを踏まえれば、黒石藩は蝦夷地警備での役割を幕府と弘前藩の双方から期待されて成立したと考えられます。

結局、黒石藩の成立は、蝦夷地警備・海防などを成し遂げるための、強い体制をつくるとした結果の一つと言うことができると思います。

（三）寧親、参勤交代の時期を願う

※参勤交代——江戸幕府が、諸大名を一年交代で江戸と領地に住ませた制度。

黒石津軽家が一万石の大名に昇進してから間もなく、文化六年（一八〇九）六月二十一日に、寧親は弘前津軽家と黒石津軽家の参勤交代の時期について幕府にお願いをしています。

寧親（弘前津軽家）と親足（黒石津軽家）が、同じ時期に江戸に向かつたり、

津軽の領国に向かつたりすることがないように、参勤交代の時期を考えて欲しいということでした。

つまり、寧親（弘前津軽家）と親足（黒石津軽家）のどちらかが、必ず國許に居ることが出来るような参勤交代にしてほしい、ということのお願いです。蝦夷地や領国（領國）の警固（けいご）のため、どちらかの藩主（はんしゆ）が現場（げんば）にいて、指揮（しき）できるようにしてほしいという思いであつたのです。

寧親の願いは、文化六年七月十四日に許可（きょか）されました。

（四）黒石津軽家—弘前藩の副藩主の立場へ

黒石藩が成立し、参勤交代の時期の依頼（いらい）が許可（きょか）されてから、弘前藩の藩主（はんしゆ）が江戸で勤務（きんむ）しているときには、黒石藩主（はんしゆ）が國許（くにもと）になりました。そして、蝦夷地（えぞち）の警備（けいび）や領内（りょうない）の沿岸警備（えんがんけいび）などにおいて、黒石藩主（はんしゆ）は、弘前藩の兵（し）をも指揮（しき）する弘前藩主（はんしゆ）名代（めいだい）として責任（せきにん）を果たしていくようになりました。

明暦二年（一六五六）、弘前津軽藩四代藩主（はんしゆ）として信政（のぶまさ）が就任（じゅうにん）するとき、その後見役（こうけんやく）として発足（はつそく）した分家（別家）（べついえ）の黒石津軽家（はんけいふようだい）が、本家（ほんけいふようだい）名代（めいだい）という

働き果たしていくことにより、しだいに弘前津軽藩「副藩主」という立場に変わつて行きました。

(五) 親足の文化的な教養と活動

黒石初代藩主となつた親足の政治は、宗藩の蝦夷地警備体制に協力していくという仕事がとても多くありました。

そのような時代でしたが、親足は和歌を好み江戸や京都の有名な師匠について学んでいました。そして、力を深めて優れた歌を詠み、江戸や京都でも名前が知られるようになつていました。幕府の家臣や他家の家臣にも、親足の教えを受けて和歌を学ぶ門人が多かつたと言われています。

京都から江戸へ勅使（天皇のお使い）としてお出でになつた身分の高い人たちと歌の交換などもされています。

また、親足は自分で和歌を詠むだけでなく、黒石陣屋に和歌を学べる「歌学所」を設けて歌道を奨励しました。そのため、家臣たちも皆歌道に励みました。しだいに和歌が盛んに詠まれ、それが黒石の文学発展の基礎を築いています。

親足は、参勤交代で黒石に帰ると、黒石弁で歌を詠んだりしました。

たさではて さしこのすそをだらめがし

なへこなげつけ いはふめらはど

へ 田さ出はて さしこの裾すそをだらめがし

苗こなげつけ 祝いわふめらはど ～

※さしこ—細かく刺さぬし縫ぬいにした綿布めんぶでつくった着衣。

※めらはど—娘たち

* 「娘たちが、田んぼに出て、着ているさしこの裾すそをゆらしながら、苗を投げつけて樂しそうに祝つてゐるよ。」

という気持ちが受け止められます。黒石の百姓に対する親足の愛情が伝わってくる歌だと思います。

第二部 黒石の文化的事柄の紹介

第二部では、黒石の文化的事柄についてお話しします。また、紹介したお話をの領域の中で、歴史的な事柄が示されていれば、そのことについても述べていきたいと思います。

一 天然記念物「村上家のイチイ」

(一) 「村上家のイチイ」の文化的な要素(基本となる内容)

① 黒石市「天然記念物」に指定された理由

黒石市上十川の柳沢にある村上家の庭に、上の写真に写っているような「イチイ」が生えています。

「イチイ」の木は、別の名で「オンコ」とか「アララギ」ともいわれる常緑高木です。



村上家のイチイ

※ 常緑高木——一年中緑の葉をつける
「常綠樹」のうち、樹高（木の高さ）が高いもののこと。

「イチイ」が生えている手前に設置されている「説明板」には、黒石市の天然記念物に指定した理由などが次のように述べられています。

名 称 黒石市指定天然記念物
所 有 者 村上家のイチイ（平成二年十二月六日指定）
指 定 理 由 当家は、浅瀬石城主千徳政氏公の家老を勤めた村上理右衛門一族の子孫で、慶長二年（一五九七）浅瀬石城が津軽為信によつて落城された後、現地に居住し庭園を造りイチイを植えたともいわれている。



説明板

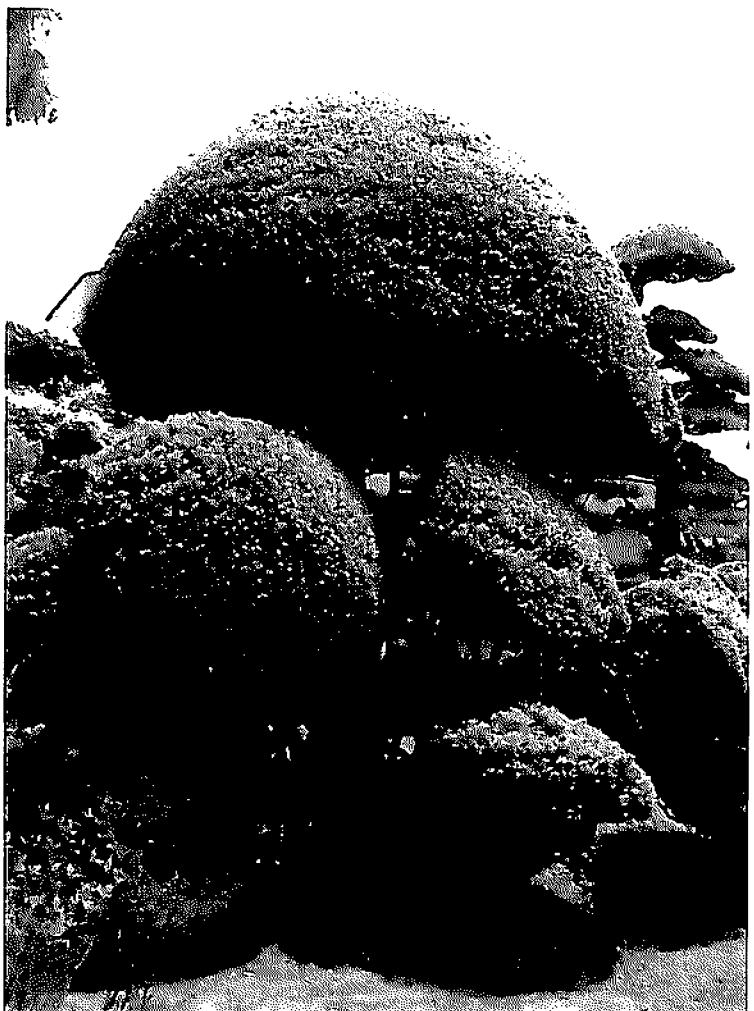
イチイは、当地では「オンコ」ともいわれる。当家のイチイは片枝流し作りの大刈り込みで、それは順風満帆の「宝船」が浮かんでいる姿そのものであり、長い年月をかけて作り上げた形状は極めて優れしており、他に誇るものである。

推定樹齢三百年以上、樹齡面で弘前市の革秀寺のイチイには及ばないが、宝船を模写した樹姿は評価される。

平成五年三月二十日

黒石市教育委員会

「村上家のイチイ」は説明板に述べられて いるように、実に見事な姿に成長を遂げています。それについて、もう少し詳しくお話しします。



村上家のイチイ

この「イチイ」が植えられたのは、村上家の祖先が慶長二年（一五九七）あたりに現在の場所に住むようになり、庭園を造つたときともいわれている。とありますように、現在の年代（二〇一六）からみると四一九年ほど前になりますが、庭園をつくり「イチイ」が植えられた年代の特定は難しいので、平成五年の時点から考えて「推定樹齡三〇〇年以上」と示されています。

樹齡（木の年齢）を予想してみると、三〇〇年以上になるだろうということです。いずれにしても、長い年月をかけて成長してきたイチイなのです。イチイの樹高（木の高さ）は五・二〇メートルあります。樹形（木の形）は、樹幹（木の幹）の中心になる梢を止めて、半球形に刈り込み、最も下にある

主枝を、地面に沿つて伸びて低い刈り込みをしています。

枝の張りは、全体の周りが三十五メートル、南北に十四・二メートル、幅六・〇メートルにもおよびます。北側が丸みを帯びているのに対して、南側が船の先のように狭い張り方をしています。

それは、まるで、追い風を受け、帆がいっぱいにふくらんでいる「宝船」が浮かんでいる姿に似ています。

この雪国で、長い年月をかけて丁寧に作り上げたものであり、しかも、すばらしい樹姿（木の姿）であることから、黒石市の天然記念物（文化財）に指定されています。

（平成二年十二月六日、「黒石市天然記念物」に指定）

「説明板」に述べられている内容の後半の部分には、文化的な要素が正確に記されていて、黒石市の天然記念物（文化財）に指定された理由が良く分かります。

また、前半の部分に記されている歴史的な事柄もとても大事な内容であると思ひますので詳しく読んでみたいと思ひます。

(二) 「説明板」の前半部分に示されている歴史的な事柄

説明板の内容の最初に、

*当家(村上家)は、浅瀬石城主千徳政氏公の家老を勤めた村上理右衛門の一族の子孫であること。

*慶長二年(一五九七)、浅瀬石城が津軽為信に攻められ落城した後、現在の土地に住んで庭園を造りイチイ植えた、ともいわれていること。などの歴史的な事柄が記されています。

そこで、現在の村上家の祖先にあたる「村上理右衛門」の活躍を主にしてお話をしたいと思います。

(三) 村上理右衛門の宇抗野合戦における活躍

①

村上理右衛門は千徳大和守政氏の家臣

村上理右衛門が仕えた浅瀬石城主千徳大和守政氏(「千徳政氏」と記していきます。)は、永録四年(一五六一)ころ、浅瀬石十代めの城主になつた殿様でした。知恵もあり、とても強い殿様でした。村上理右衛門はその千徳政氏

の家臣でした。

② 為信と政氏の盟約——永録の約

昔の津軽の地域は、南部氏が安東氏を滅ぼした後、津軽全体を支配しました。

※南部氏の津軽支配の時期——南部氏が藤崎城主の安東氏を討ち、津軽支配のため石川城に南部高信を置いたのは天文二年（一五三三）とする説と文亀二年（一五〇二）とする説があります。

南部氏が津軽を支配するために、津軽の大事な地域に南部一族の者や南部氏に従う武士を置いて治めていました。しかし、長年にわたって、津軽で生産した米などを厳しく取り立てる、という政治が続いたので、土地の百姓の反感もしだいに増していき、心が南部氏から離れていきました。また、そのころの南部氏の支配地は、青森県全部と秋田県北部、それに岩手県におよんでいました。その広い地域を交通や通信の発達していくかつた当時、南部氏の一族だけで治めようとすることは無理なことでした。年月がたつにしたがつて一族のつながりも弱くなつていき、利害関係が出

できたりしました。

そのような南部氏の弱点をついて、大浦為信（後の津軽為信）が津軽統一にのりだしました。

永録六年（一五六三）のころ、千徳政氏は大浦為信と南部の勢力の強かつた津軽を共に統一することについて、「永録の約」と称されている盟約（同じ目的を成し遂げるため、味方同志となるという約束）を結んだと伝えられています。そして、それまで津軽を治めていた南部方を相手に、為信の盟友として共に戦いました。

為信が南部方である平賀の大光寺城（城主滝本播磨守重行）を攻めたときも、三百人くらいの兵を率いて為信の応援に向かい戦いに参加しました。大光寺城は落城し、城主の滝本播磨守重行は南部に去つて行きました。その後も為信に協力して南部方を攻めました。

③ 南部氏、浅瀬石城攻めを決定

津軽における南部の勢力が、しだいに失われていくことを防ぐため、南部の領主南部信直は、二手の軍で津軽に攻め込んでいくことにしました。そして、一方の大将に重臣（重要な家臣）の名久井城主東政勝を任命し

て、浅瀬石城を攻め落すよう命じました。

天正十三年（一五八五）四月、まだ残雪のあるころに、東政勝に率いられた南部勢が津軽に向かつて進軍してきました。

※ 東政勝—昔の津軽の文書では、名久井日向守とか下長名抗日向守などと書かれています。お話では「東

政勝」を用いました。

その南部勢は三千人あまりの大軍です。十和田山中や湖畔を抜け、八甲田山を越えて津軽の黒森山（現在の黒石市の黒森）の東に出ました。そして、浅瀬石を攻撃するため、そこから黒石村の東にある宇杭野に進み、そこに陣を構えました。

宇杭野というのは、現在の黒石市山形町の上の方面から中郷の東野添の地域あたりまで広がる場所、と言われています。そのころは野原でした。宇杭野の南側にある黒石川（現在の浅瀬石川）を挟んで、その向かい側に千徳政氏の本拠である浅瀬石城が建つていました。そこは、現在の黒石市高賀野の高台になっています。ですから、南部勢は浅瀬石城に対して宇杭野の地に陣を張つたということでしょう。

④ 浅瀬石勢の備え

三千あまりの南部勢は、さつく浅瀬石城に攻め込む準備をしました。一方の浅瀬石勢は、城にいる兵が三百人くらいでした。攻めてきた南部の軍勢から見ると、十分の一ほどの数よりありませんでした。でも、城主の千徳政氏は豪気な性格で軍略にもすぐれていきました。

まず、状況をよく見て、主だつた家臣たちと、攻めてくる南部勢を向かい討つて退けるための軍議を十分おこないました。そして、同盟者（同じ目的を成し遂げる味方）と考えている大浦為信の所に急使を走らせ、状況を伝えて応援を求めました。

また、本郷村や竹鼻村のあたりに住む農民たちに申しつけ、浪岡方面に通つている街道の土を掘つて柵を立て、南部の軍勢が簡単に通れないような工事をさせました。そして、浅瀬石城にいる味方の兵に替わつてそこを守らせ、宇杭野との通路を塞ぎ、南部勢の攻めに備えました。

浅瀬石の城の中には三百人くらいの兵よりいませんので、領内の農民・村民を集めて兵（民兵）にしました。そのころ浅瀬石の城下には七百軒ほどの民家がありましたので、「男子十六歳以上、刀のある者はそれを使い、無

い者は鉈なたでも鎌かまでも斧おのでも、それを武器に使うように準備じゅんびをして浅瀬石を守る兵となれ。」

というお触れが出ると、我われも我われもと集まつて来る者が続き、一千人ほどになりました。その中には、女人たちもたくさんいましたし黒石の村から来た人もいました。

男はだいたい十六歳から六十歳の爺じいさんまで、みんな兵になりました。女人たちは、若い娘たちも年配ねんばいの人たちも炊事さいじがかりなどにあてられました。

浅瀬石も黒石も、滅ぶか生き延びることができるのは瀬戸際せとぎわであつたのです。そのことが分かつていましたから、みんな必死ひっしでした。

城主の千徳政氏せんとくまさうじは、南部の兵に攻撃こうげきされた場合ばあい、それをどのように方法で防いでいくのか、武器の扱いや戦いの仕方しおうなど、いろいろな工夫くふうをしました。

男の人たちで刀のない者には、鉈なたや鎌かまや斧おのを棒ぼうの先に結びつけて持たせました。敵の足を払う武器として用いることもできるからです。竹や枝を用いて竹槍たけやりや木槍きやりもつくらせました。炊事すいじがかりの女人たちには、城の

ところどころに大きな釜をすえて湯を沸かさせ、それに塩を入れて沸騰させた熱湯を、城の堀を乗り越えようとする敵兵に浴びせかけれるようにな準備させました。そのために使う柄を長くした柄杓もつくり、それぞれの釜の側に数本置きました。

そして、みんなに、長い竿や長い竹の先に、帷子（裏をつけない着物）や長い布・手ぬぐいなどをくくりつけさせたり、紙の旗に浅瀬石城の武士たちの家紋を描かせて本物の旗に見せかける工夫をしました。そして、それらを本物の旗に加えて、城の隅から隅まで立て並べさせました。浅瀬石城に大軍が立てこもつているように見せるためでした。

千徳政氏は、南部勢が攻めよせてきても、大浦為信の軍勢が応援に来るまで、なんとか持ちこたえたいものと思い、戦いに備えていました。

宇杭野に陣を構えた南部勢は、浅瀬石城の周りにはためく旗の数を見て、城の中には大軍がいるものと思いました。

それで、なかなか攻め込んで行けませんでした。

⑤ 南部勢の攻撃

そのうち、だんだん兵たちの食べる物が減つてきたので、総大将の東正

勝は、謀りごとで淺瀬石城を落とそうと考え、塔堂外記という人を軍使として浅瀬石城に向かわせました。

昔は、どちらが敵側に軍使を出したとしても、「話し合うための使いの役目」でやつて来るということで、「軍使を攻撃しない」という戦いにおける「しきたり」がありました。ですから、南部方の軍使は敵方の浅瀬石の城に入り、用事を済ませることができたわけです。

軍使の塔堂外記は千徳政氏に会い、

「千徳家はもともと南部から派遣され、恩を受けた家でありながら、今は敵方の大浦に味方して手向かつている。とても『けしからぬこと』である。南部に味方するのであれば命は助けるが、敵対するのであれば直ちに軍勢で攻め込むであろう。滅ぶも生き延びるもこのことにかかっている。返答を聞きたい。」

と話しました。千徳政氏は、

「誠に遠い土地までの出陣、その苦労はよく分かる。また、千徳家と南部との以前の事情は十分に分かつていて、

しかしながら、今は、正しい人の道を重く見る側に味方し、人の道に外



南部勢の出陣

れる政治の仕方には味方しない。どうしてそれが『けしからぬこと』と言えるのか。

南部勢にこの城を明け渡すなど思いもよらない。そのことを南部の殿（南部信直）に伝えでもらいたい。武士として一戦をして運命を決めたい。」

と言つて、軍使を宇杭野にある南部勢の陣へ帰しました。

塔堂外記は、陣に帰つて総大将の東正勝に千徳政氏の返事を伝えました。また、自分でびつくりしたことも伝えました。それは、城の中には大軍がいると思つていたのが、その大部分が、普段は戦いに縁のない村人や百姓の人たちであつたことでした。

千徳政氏の思いと浅瀬石方の兵のようすを知つた総大将の東正勝は、「それならば、ひ

と潰しに城を取つてやろう。」として、三千あまりの兵を三つに分けて三方から浅瀬石に攻め寄せていくことにしました。

そこで、次のようになんばりに陣を敷きました。

南部勢が陣を敷いている宇抗野から見て、東に連なる斜面の土地は、ちょうど国道の南裏にあたり現在黒石東公園と称され見晴らしのよい場所です。ここはもとから石法師と呼ばれている宇抗野の外側に当たる場所です。

東公園の前方には黒石川（現在の浅瀬石川）が流れでいて、川の手前にはその当時中川原がありました。三方に分かれた一隊めの兵は、その川原に出動して陣を敷きました。

また、二隊めの兵は川を渡つて今の浅瀬石集落の下方に進み、阿弥陀屋敷と呼ばれる場所に陣を取りました。

三隊めの兵は、宇抗野から東公園の所、即ち石法師を通つて石名坂と浅瀬石の通り口になる辻堂口に陣を取りました。昔はここに辻堂という祠があつたと言われ、浅瀬石集落の少し上方に当たつている場所です。

南部勢はそのように三方から浅瀬石を攻撃する陣をつくり、一齊に攻撃



を始めました。

⑥ 浅瀬石勢・村上理右衛門の奮闘（力をふるつて戦う）
浅瀬石方では、準備していった武器や工夫していった方法を上手に用いて防ぎました。城の堀に取り付く敵があれば、民兵も準備して熱湯を浴びせかけたり、大きな石や木を落して退けました。

南部勢は大人數で攻めてきましたが、浅瀬石城周辺の詳しい地形については知りませんでした。浅瀬石方では地形を利用して、寄せ手に見つからないように迫つていき突然攻撃したり、謀りごとを立てて、敵を用水堰の中や脇道に上手に誘い入れて攻撃したり、深田の内に追い入れたりして散々に討ち破りました。

そのときのことです。村上理右衛門は、宇杭野の陣に引き上げて行こうとする南部勢の中に、良い敵がいれば打ちかかろうと準備をしていました。

理右衛門の家来の大炊之助という者は大力で、常に七八人力はあると人々に言われている武勇にすぐれている者でした。素肌に白鉢巻きをして、六尺（約二メートル）あまりの櫻の木の太い八角棒を右手に持ち、理右

衛門の馬の脇に従いました。

理右衛門の三十歳くらいの妻は心の強い女で、小袖の着物を着て片腕を脱ぎ、白い鉢巻きをして小型の長刀を小脇に抱えて夫の乗馬につき従いました。さらに、家で召し使つて下男下女たちにも手に棒や長竿を持たせ、召し連れました。

理右衛門と妻や家来たち、十三人が戦場に出ると、ちょうどそのとき宇杭野の陣に帰る敵の騎馬武者（馬に乗つ武士）の集団と出会いました。理右衛門は、

「引き上げていくのは敵の南部勢ぞ。余すことなく討ち取れ！」
と命じました。大炊之助は例の八角棒を振り回し、人や馬の区別なく大暴れに暴れて打ちさえました。理右衛門夫妻も戦いに出た家来たちも必死になつて戦いました。傷を負う家来も出てきました。

理右衛門の妻は、小型の長刀を振り回して戦い、敵兵二人を討ち取りました。男の兵でも難しいことなのに、女の身ではまれなこと、と言われました。

これと同時に、大炊之助は櫻の木の太い八角棒で敵の騎馬武者（馬に乗つ

た兵)を打ち倒しました。理右衛門の妻は、その武者は兜をかぶっているから、きっと一方の大将に違いないと思ひ、「その騎馬武者は普通の武者ではないぞ。兜をつけさせたままで討ち取れ！」

と云いつけました。これを兜首といつて、討ち取った人はすごい手柄となります。後でその騎馬武者を良く見たら、兵の指揮に用いる采配を持つていたそうで、一方の大将であることがはつきりしました。

混乱する戦いの中で、よくそんなところまで気がついたものだ、と浅瀬石方の人たちは感心したそうです。理右衛門主従（主人と家来）は、すごい働きをして城に帰り、家来たちの傷の手当てをしました。

戦いは続き、三千人あまりの南部勢は、わずか三百人くらいの浅瀬石勢と農民・村民の民兵に打ち破られて、宇杭野の陣に逃げ帰る兵が続いていました。

傷の手当てが終わつた理右衛門主従は、戦いのようすを調べるために退き口（敵が引きあげていく通り道）である浅瀬石川原の方向に向かいました。すると、まだ敵を追いかけようとする味方の兵が目につきましたので、理

右衛門は馬を乗りまわしながら、

「当方（浅瀬石方）は少人数なり、いつまでも追い続けるのはやめよ。」

とたしなめました。それから浅瀬石川原まで馬を進めました。

ところが、その近くに敵の兵がこつそり隠れていて、柳の木の陰からババババーンと、一齊に鉄砲を撃ちかけてきました。

その一弾が理右衛門の股を撃ち抜きました。重傷を負った理右衛門は、馬からどうつと落ちてしまいました。敵兵は理右衛門を討とうとして迫つて来ます。妻や家来たちは、すばやく理右衛門を抱き起こして馬に乗せ、敵にはさほどの傷ではないよう見せかけ、迫つて来る敵を振り切り、城に引き上げようと歩みを進めました。

ちょうどそのような場に、敵方の兵を引き連れて通り過ぎようとする騎馬武者がいました。何とその騎馬武者は、寄せ手の総大将である東政勝でした。東政勝は、味方の先陣の者たちが勢いよく攻めていったのは良いのですが、浅瀬石方の謀りごとに乗せられ、負けて逃げ帰る兵が続くため、自ら退き口の最後を守り、味方の軍勢を引きあげさせながら通りかかったものでした。



村上 理右衛門

理右衛門は、その敵の騎馬武者が南部勢の総大将であることを全く知りませんでした。重傷を受けた身であることも体の痛みも忘れ、

「これぞ良い敵に出会った。勝負！」

と馬を駆けさせ向かつて行きました。敵の騎馬武者も向かつて来ました。その中央には溝がありました。そこを飛び違いざまに、理右衛門は手を伸ばして敵の眉庇をつかもうとしました。しかし、それを取り外し、背に着けてある旗差物を抜き取りました。

※眉庇—兜の鉢の前方に、ひたいを守るためについてい
るもの。

※旗差物—昔、鎧の背中にさして戦場で目印とした小
旗。はたさし。武将としては自分をあらわす大事なも

のと受け止められていた。

敵は理右衛門の攻撃を避けて走り去りましたが、東正勝は南部勢の総大将として旗差物を奪われたことをとても恥に思い、引き返して理右衛門と勝負しようと乗馬の向きを変え理右衛門の方に向けて駆けだそうとしました。びっくりしたのは付き従っていた南部方の侍たちでした。必死

でやめさせようとし、乗馬の向きを理右衛門の方向から引き戻し、南部勢の陣のある宇杭野の方に向けました。もし、総大将に万が一のことがあれば取り返しがつかないからでした。東正勝は、無念ながらしぶしぶ宇杭野の陣に帰りました。

理右衛門は、軍勢を指揮して浅瀬石川原に来ていた主君の千徳政氏に会いました。痛手を負つていたので、許しを得て馬の鞍坪に乗つたまま、これまでの戦いのようすを報告し敵の騎馬武者から奪つた旗差物を差し出しました。千徳政氏はとても驚き、

「この旗差物は今朝もこの目で見ていい。まさしく敵の総大将東正勝の差物である。武将が戦場で活躍の証として最も大事に扱つている旗差物を奪つたことは大きな手柄。もし、理右衛門が重傷を負つていなければ、敵の総大将を討ち取つていたことであろう。そのことは残念に思うが、これまでの戦いで理右衛門があげた手柄は、他の者とは比較できないほどすぐれているものである。」

と、浅瀬石勢の前で理右衛門を褒めたたえました。そして、

「身に重い傷を負つているようだから、早々に帰つて治療を受けよ。」

と命じました。理右衛門は十分に手柄を認められ、主従一同浅瀬石城に

帰りました。

浅瀬石勢は、知謀豊かで勇氣あふれる城主千徳政氏の指揮に従がい、兵も農民・村民の民兵も、理右衛門主従のように一人ひとりが勇敢に戦いました。千徳政氏から応援をお願いされたいた大浦為信は、軍勢を率いて高木野（現在の平川市一尾上町高木）に陣を構え、機会をうかがつてきました。でも、ほとんど浅瀬石勢で南部勢を討ち破つてしまつたのでした。

浅瀬石城攻撃がみじめな負け戦に終わつた南部勢は、宇杭野の陣を引き払い、浪岡を通つて小湊をめざして逃げ去り、南部に帰つて行きました。南部のもう一方の大軍は、南部の領主南部信直が率いて津軽を攻めるため別の道を進んで来ていましたが、南部の地元に信直に敵対する者があつて不安が生じ、そのため途中で引き返していましたから、浅瀬石勢の勝利はますます確かなものとなりました。

「村上家のイチイ」の説明板に、名前が示されている村上理右衛門が活躍したこのときの戦争は「宇杭野合戦」と呼ばれ、理右衛門の活躍と共に

記録に残っています。

(四) 宇杭野合戦後の千徳家

宇杭野合戦の後、理右衛門の主君である浅瀬石城主の千徳家がどのようになつて行つたのか、という要点をお話しましょう。

宇杭野合戦の勝利で、千徳政氏の領地は、お城のある浅瀬石を中心として、ほば、奥山形・中川（黒石市内）・高樋・垂柳（田舎館村内）・黒石宇和堰分（宇和堰の南側の辺り）・浪岡の内（北中野）・外ヶ浜の内（青森の新城・沖館）まで広がり、七千五百石ほどの領地を治めることになりました。そして、浅瀬石の城下も多くの神社やお寺が建つていて、民家の数も七百軒あまりというほど隆盛になりました。

宇杭野合戦が終わつてから、大浦為信は南部方の田舎館城を攻撃しました。千徳政氏はそれにも協力し、田舎館城が滅んだ後に隠居しました。その跡は、長男の千徳安芸守政保（政康とも・お話を千徳政保と記します。）を十一代浅瀬石城主にして跡を継がせ、天正十六年（一五八八）に亡くなりました。

為信は、八月に千徳家の菩提寺神宗寺で行なわれた千徳政氏のお葬式に、家来の梶形仁右衛門・大曲和泉に兵百人あまりをつけて参加させました。

① 津軽為信と千徳政保の対立

やがて、津軽地方の大部分を平定した為信は、豊臣秀吉を中心に統一國家の時代がはじまるうとしていることに気づき、手に入れた領地を秀吉に正式に認めてもらおうとはたらきかけました。

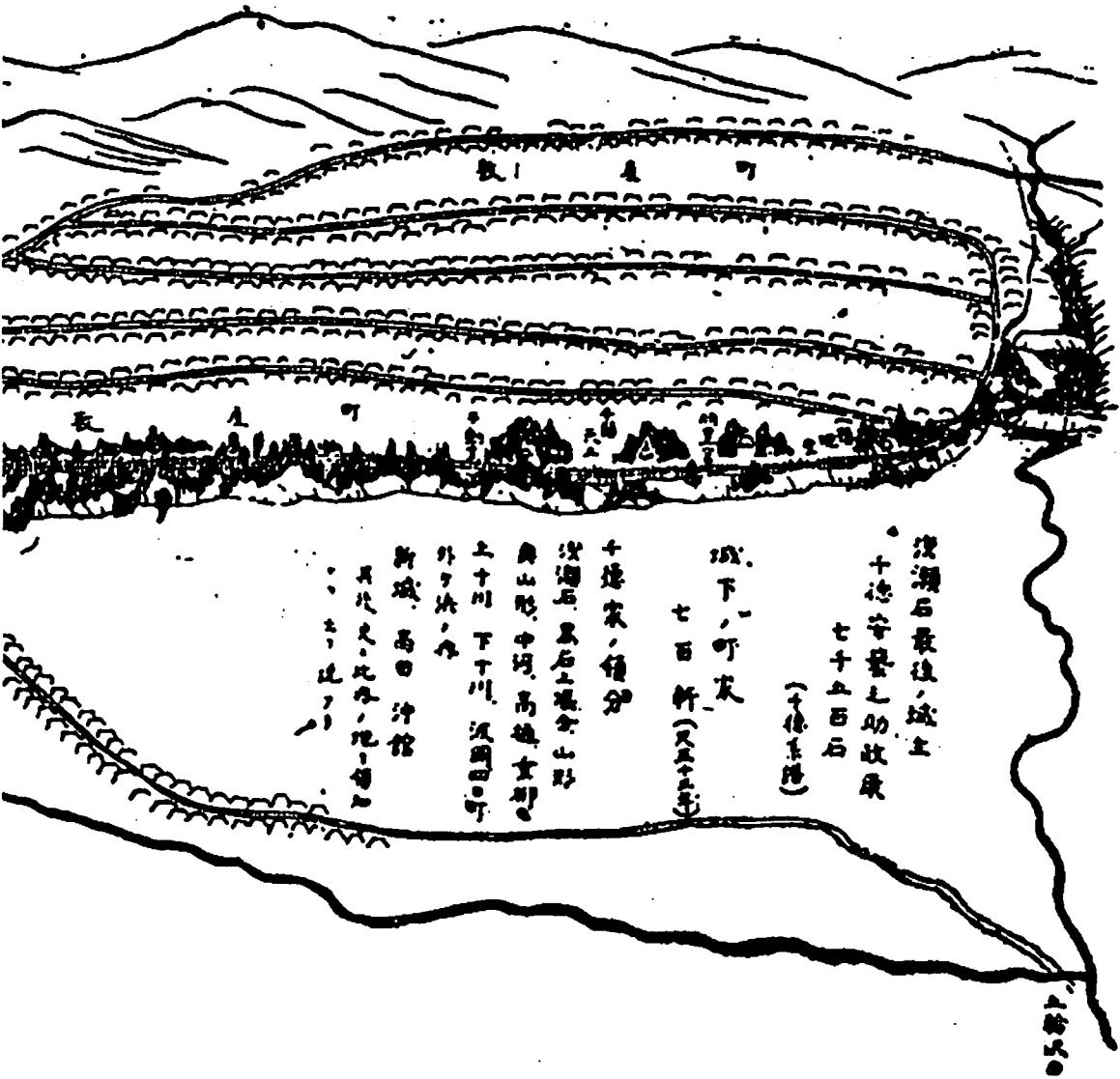
その結果、天正十八年（一五九〇）に津軽領を支配することを認められ、天正十九年（一五九一）に知行高も示されました。

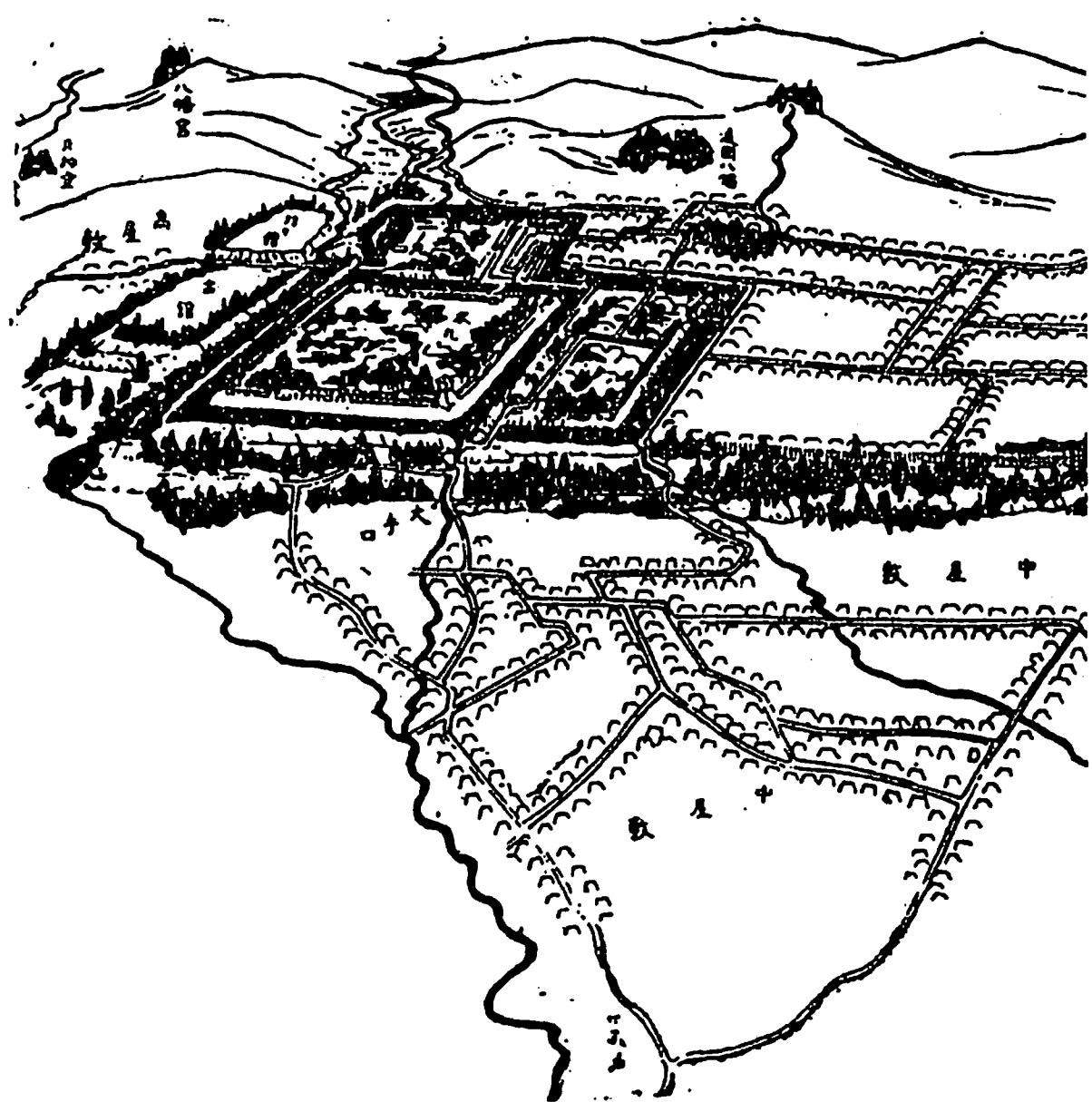
※示された知行高—津軽領は全体で四万五〇〇〇石とし、為信に宛がう領地は三万石、秀吉が治める領地は

一万五〇〇〇石とされました。

秀吉に受け入れられ、津軽領支配の石高まで承認された為信は、津軽為信と名乗り津軽領の支配者になりました。

そうなりますと、千徳家は津軽為信の盟友というよりも、一家臣と言いうように変化してきます。しかしながら、千徳家は領地も広く津軽の全領





No.5 淺瀬石城および城下の図

域から見ても大きな存在になつていきました。

為信は、文禄三年（一五九四）二月、千徳政保をあたらしく造つた堀越城に招いて話しました。千徳家の領地を別な場所に変更し、家来の数も百五十人ほどとして、残りは為信の城に移すようなどいふことでしたが、千徳政保は納得しませんでした。浅瀬石城主の千徳政保としては、永録六年（一五六三）のころ、為信と父の千徳政氏が取り交わした盟約によつて、千徳家が為信に協力してきたこともあり、率直に納得できなかつたのではないでしようか。

② 浅瀬石城の落城

千徳政保と津軽為信とのあいだが、しだいに険悪になつてきて双方とも戦いの準備を始めました。状況を見ていた為信は、慶長二年（一五九七）二月、二千二百人ほどの軍勢で浅瀬石城に攻めできました。為信は、政保の有力な家来を味方に招き入れていました。木村越後などは、前の浅瀬石城主である千徳政氏にも仕えて数々の手柄を立てた功臣であり、政保の有力な家来でしたが、主だった人たち十数人と共に為信の味方となり、浅瀬石城に攻め込んで来たのでした。

浅瀬石方の兵は、以前より相当増えていましたし、必死に戦つて防ぎました。しかし、敵に味方して攻め込んで来た兵は浅瀬石城のようすをよく知っています。それに、浅瀬石勢の数倍もの大軍が相手です。一週間ほど激しい戦いが続くうちに、次々に討ち死にしていきました。

そして、慶長二年（一五九七）二月二十八日、浅瀬石城は火に包まれ、城主の千徳政保は十数人の家来と共に自ら命を絶ちました。そのころ、家来の家五百三十戸ほど・農家や村民の家は一千三百三十戸ほどとなり、多くのお寺や神社も建つていて、とても栄えていたのですが、激しい戦いの場となつて、城もそれらの建物もほとんど燃えてしましました。

浅瀬石城が落城し、激しい戦の中を生き残った千徳家の家来たちや千徳家と縁の深い人たちは、津軽方の追跡を逃れ、安心して住めるところを見つけて、そこで暮らしていくことになりました。

村上家もそのような事情があつて現在の場所に移り住んだわけです。村上家の見事なイチイをゆっくり見ていると、そのような歴史を語り継いできているような思いになります。

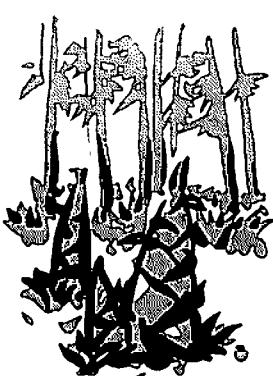
(五)

「文化財」の誕生と歴史的な背景

「前集の要項」でも述べましたように、黒石領や黒石領主が誕生したのは明暦二年（一六五六）ということで、現在の年代からみると相当以前になります。

村上理右衛門が活躍した宇抗野合戦は、天正十三年（一五八五）に起こつていますので、黒石領誕生のときから、さらに七十一年も前の時代の出来事になります。

「文化財—村上家のイチイ」が誕生した要因（物事がそうなつた主要な原因）についてお話しましたが、この紹介した文化財に限らず、それぞれの文化財が成立していく過程には、その時代に生きた人々の思いを抱いて歩み続けた歴史が存在している、ということを心に入れておきましょう。



二 黒森山淨仙寺の仁王像と文学碑

黒石市の中中心街から東の方を見ますと、お椀を伏せたような丸い形の山があります。標高（海水面からの高さ）六〇六メートルの黒森山（黒石市大字南中野字黒森）です。

黒森山の中腹に、淨仙寺というお寺があります。黒森山淨仙寺は、文政七年（一八二四）山崎是空という行者（仏教を修行している人）によつて建てられました。

山崎是空は、初め黒石来迎寺のお坊さんについて学びましたが、二十五歳のとき、修行を深めるために中野の不動尊境内の洞窟で断食修行をしました。

※修行——教えの意味を捉えるため、心身ともに鍛錬すること。

※境内——お寺や神社の土地で、外との境界の内側。

※断食修行——一定の間、食べ物を断つて修行すること。



黒森山淨仙寺

その修行中、

「これより北の方にある清水の湧き出る所で修行せよ。」

というお告げがありました。

そこで、黒森山に出かけ、山の中腹に清水を発見したので、その場所を一生の修行の場と定めました。（この清水は、現在本堂の脇にあり、年中変わらない水量を湧き出しています。）

また、「黒石藩」があつた時代、農民で学問を必要とする庄屋の子供たちなどは、たいてい淨仙寺で学習したことで知られています。淨仙寺が寺小屋であつたわけです。

明治時代に入りますと、黒森の寺小屋は「黒森学校」とも呼ばれました。そのころは、青森県内はもちろん、遠く秋田県辺りからでも淨仙寺に学びに来る者が多かつたと言われて



淨仙寺山門

い
ま
す。

淨仙寺は、このように古い歴史を持つたお寺です。今回は黒石の「文化的的事柄」の一つとして、このお寺にある「仁王像」と「文学碑」を紹介したいと思います。

(一) 有形文化財「淨仙寺仁王像」

① 阿形像と吽形像

淨仙寺の入口にある山門内に、境内を守るかのように一対（二つでひと組）の仁王像が建てられています。二体とも杉で作られていて、高さが二・五三メートル、胴回りが一・九メートルもある大きな像です。

向かつて右側が口が開いている阿形像で、常に仏の近くに居て、仏教の敵を追い払う「蜜迹金剛」という仁王様です。向かつて左側



向かって左側～吽形像



向かって右側～阿形像

が口が閉じている吽形像で、人々を憐れむ心も強く、大力もあり、仏を守ろうとしている「那羅延金剛力士」という仁王様です。

ゆっくり観察しますと、二体ともとても勇猛な姿をしています。「びくとも動かないぞ」と足を広げた「仁王立ち」で立ちはだかり、お寺の境内に入り込もうとする仏敵（仏さまの敵）を寄せ付けまいとする姿勢で、いざとなれば、すばやく闘いに挑む姿をあらわしています。まるで、その雰囲気が伝わってくるようです。

※阿吽について—阿吽は「梵字」といつ

て、インドで仏教の書物を書くときには使われた文字で、仏教が日本に伝わってきたとき、この文字も伝わってきました。「悉曇文字」とも言われています。

その文字の配列^{はいだつ}で、最初の字が「阿」であり、最後の字が「吽」^{うん}になっています。字の形は次に示しておきました。



No.6

阿

「阿」は口を開いて発する音声^{おんせい}で、一番最初に書かれている字の音^{おん}です。
「吽」は口を閉じて発する音声^{おんせい}で最後の字の音^{おん}になります。

吽

佛教では、そのことからそれぞれ、口を開いて発音する「阿」を一切の物事の始まり、口を閉じて発音する「吽」を一切の物事の終わりをあらわすものとし……、「阿」を教える真実を求める心に、「吽」をその結果として最後に落ち着く智德（智慧と人徳）、或いは心身安らかな姿を意味するものとしています。

お寺の山門の左右にある仁王像や通路などに置かれている狛犬が、一方が口を開き、一方が口を閉じているのは、これをあらわしています。

また、一対（二つそろってひと組）として扱われ物をあらわす用語としても使われました。特に、狛犬や仁王など一対で存在する像として仏教では大事にされてきました。

二人の人物が、ぴったりと呼吸まで合わせるように共に行動しているようすにも「阿吽の呼吸」「阿吽の仲」などと用いられています。

仁王像の胎内には、
「制作者は秋田日浪村の奈良喜世吉」と言う人で、元治二年（一八六五）、弘前市乳井村の工藤丹十郎が、同村の福王寺（現在の乳井神社）に寄進したものである。』

ということが記されています。
しかし、明治初年には、神と仏と一緒に祀る習慣を禁止し、神と仏・神

社と寺院をはつきり区別させる神仏分離令が発令されました。それで、同じ建物に神仏を一緒に祀ることが出来なくなり、福王寺では仁王像を寄進しゃくどうたんじゅうろう者の工藤丹十郎に返したものと思われます。

そして、明治五年（一八七二）に仁王像と山門が浄仙寺に移されていきます。また、昭和三十六年（一九六一）と昭和五十七年（一九八二）に色が塗りなおされているため、最初にどんな色をしていたのかはつきり分かつていません。しかし、

- | | |
|---------|------------------|
| ① 制作の年代 | 元治二年（一八六五）一月十四日 |
| ② 制作した人 | 秋田　日浪村　細工人　奈良喜世吉 |
| ③ 寄進した人 | 弘前市　乳井村　工藤丹十郎 |
- などがはつきりしており、それに数少ないめずらしい仁王像でありますので、黒石市の有形文化財に指定されました。

（昭和五十九年十月十二日、黒石市有形文化財に指定）

（二）浄仙寺の「文学碑」

山門内の両側に、睨みを効かせて立っている仁王像の間を通つて門を抜ぬ



文学の森（小廣場）



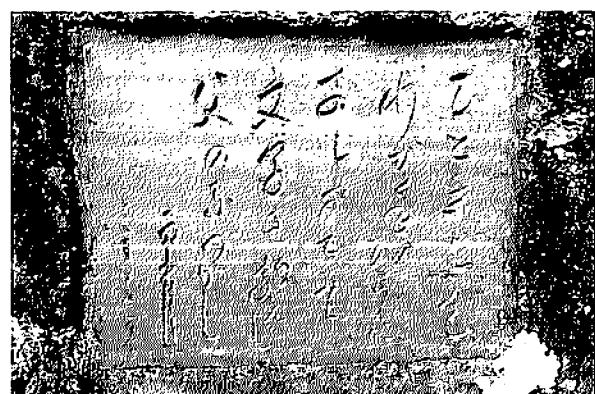
木橋→石段→不動堂

けれど、森に囲まれた広々として静かな境内がひろがっています。

本堂の横にある池の木橋を渡り、石段を登つて行きますと不動堂に着きます。その周辺は小廣場になつていて、秋田雨雀や丹羽洋岳など、黒石市や黒石市に関係の深い文學者たちの碑が、苔の生えた自然石にはめられて建っています。

この場所は、郷土の生んだ文人の文學碑が数多くあり、「文学の森」とも言われています。
今回は、それらの文學碑の中から、七基選んで刻字されていいる作品と作者のようすを紹介したいと思います。

① 紹介する文学碑七基



ひとさしを
わが手のひらに
おしあてて
文字を教えし
父のなつかし
雨 雀

秋 田 雨 雀
出生地 黒石市前町生まれ

明治十六年～昭和三十七年五月十三日逝去（八十歳）

※逝去—亡くなられたこと

演劇・詩・短歌・俳句・童話など幅広い文化活動をおこない、青年たちにそれらの指導もして、その功績はとても大きい方です。昭和三十五年（一九六〇年）

九六〇)には、黒石市の名誉市民に選ばれました。晩年は東京に舞台芸術院を創り指導にあたりました。

二、

いづちあつて

迷ふやうはまことにわる

あれ

ありとま

雲々えまよう
要吉

いのちあつて

迷わぬものはどこにある

あれ

あのどおり

雲々えまよう
要吉

鳴なる

海み

要よう

吉きち

出生地

黒石市

横町

生まれ

明治十六年～昭和三十四年十二月十七日逝去(七十七歳)

秋田雨雀

あきたうじやく

ようしょう

とは幼少のころからの友人で、

文学者島崎藤村

ゆうじん

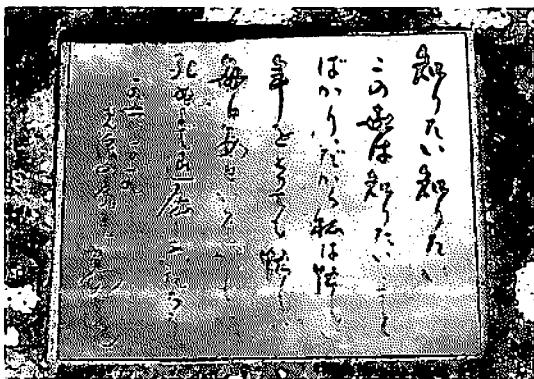
の詩文を読ん

ぶんがくしゃしまさきどうそん

しぶん

で、文学を志したといわれています。明治三十年（一八九七）代に、伝統的な「書きことば」の表現から離れ、日常の「話しことば」を用いて歌や詩文を表現する口語歌運動をおこし、生涯それを続けた詩人と言えましょう。大正十五年（一九二六）口語歌誌を創刊しています。また、ローマ字詩や童話などもよく書いた方です。

三、



知りたい知りたい、
この世は知りたいこと
ばかり。だから私は忙しい、
年をとつても忙しい。
毎日毎日忙しい。
死ぬまで退屈しないだろう。

鳴海 完造

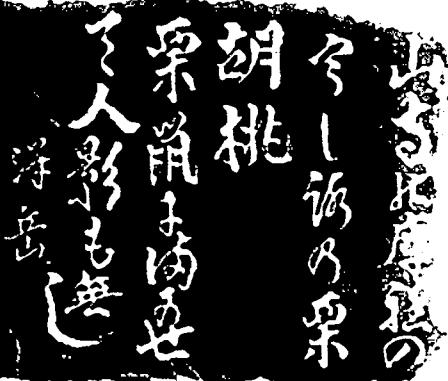
出生地 黒石市前町生まれ

明治三十二年（昭和四十九年十二月九日逝去）（七十六歳）

幼少のころよりも優秀な方で神童と言われ、書は書家よりもうまいとも言われました。

ロシア語を勉強し、秋田雨雀が招かれてロシアに行くとき通訳として一緒に行きました。それ以来日本語教師として十年間ロシアにいました。帰つてから弘前大学のロシア語教師となつた方です。

四、



山寺の庫裡の
うしろの栗

胡桃

栗鼠にまかせ

て人影も無し

洋岳

丹羽洋岳 出生地 黒石市板留生まれ

明治二十二年（昭和四十八年五月四日逝去）（八十四歳）

丹羽洋岳が歌の勉強に入つたのは、明治三十六年（一九〇三）の十四歳のときからでした。有名な文学者である石川琢木の指導を受けたり、若山牧水と交わつたりして修養を深め、明治・大正・昭和の時代にわたつて作歌に努め、多くの優れた歌を残した方です。昭和三十四年（一九五九）には、「第一回青森県文化賞」を受賞しました。

五、



赤とんぼ

収容所の柵を

こえて行く

福士一郎

福士一郎　ろうじ いちろう
出生地　黒石市元町生まれ　もとまち

明治四十四年～昭和五十五年五月二十四日逝去（六十八歳）
第二次世界大戦が終わったとき、ソ連の捕虜収容所に送られました。そこで三年間どごめ置かれてから帰国しました。捕虜収容所で暮らしていたときに「赤トンボ」の情景があつたのだと思ひます。

帰國してから「みなみ新報（現在の津軽新報社）」社長として永らく勤務しました。その間に、黒石文学会長も務めて、文学や演劇などの運動で活躍しました。黒石の文学が盛んになるように力を尽くした方です。

六



釈迦牟尼も御堂にありて郭公を
きくかに目をばつむりおはせる

中村海六郎
なかむらかいろくろう

出生地 青森市寺町生まれ、黒石市裏町中村家の

養子となる。

明治三十六年（昭和十三年九月五日逝去）（三十六歳）
せいかきよ

大正九年（一九二〇）弘前中学校卒業後、東洋大學文学部に進みましたが、怪我のため中退し「文学」の道に進みました。一時東京に出て文学の仕事に励んだ後、黒石に帰り作歌活動で活躍し、昭和五年（一九三〇）黒石文学会を作つた方です。

作歌にも優れた力を示しました。「花は紅」という長編小説を当時の東奥日報に発表し、話題となりました。





サルビヤは

今年もさいて

いつも紅

たつお

藤
ふじ

田
たな

龍
たつ

雄
お

出生地
しゆうち

平川市
ひらかわし

—平賀町
ひらかまち

生まれ
生まれ

昭和三年～昭和五十五年四月十三日逝去（五十三歳）

俳句や童話などの創作活動に才能を發揮した方です。平賀（平川市平賀）

の生まれですが、秋田雨雀の生まれた黒石の小学校に勤めたこともあり、
郷土作家研究会が出来てから全力を尽くして秋田雨雀の研究を続け、そ

の研究に一生を捧げたといつてもよい方です。

書き著わした本には、「秋田雨雀研究」（青森県文学史一・二・三卷）などがあります。



② 文学碑を取材して

文学碑の状況を調べるために、九月に淨仙寺を訪れました。歌碑が淨仙寺の山腹に散らばって建っていますので、確認するのに山の小道を巡りましたが、折れた木々や枯れ葉に覆われて見つけにくい歌碑もありました。幸い、淨仙寺の住職が一緒に巡ってくれましたので、時間は相当かかりましたが十三基の全歌碑を確認し記録写真も撮影することができます。

ただ、写真撮影のとき困ったことは、歌碑の面がそれぞれの方角を向いていますから、日光の当たる角度が違つたり、木の葉の影になつたりで、歌碑の面に彫られている字が鮮明に写らなかつたものもありました。

十三基の歌碑の内、分かりやすいと思われる歌碑を七基皆さんに紹介したのですが、彫られている言葉がはつきり写つていない歌碑は、了解を得て黒石文学会で紹介している拓本（刻まれてある文字を紙に写し取つたもの）で示している歌碑を用いました。

石の階段を登つて行き、不動堂のまわりの小広場に着いたとき、そこには五・六基の歌碑が少し距離をおいて建てられていました。まず、目を引いたのは秋田雨雀の

ひとさしを わが手のひらにおしあてて

文字を教えし父のなつかし

という歌碑でした。その歌を鑑賞していると、雨雀が幼かつたころの父との触れ合いの温かさが、伝わつて来るような感じがしました。

雨雀の父は玄庵という人で、雨雀が生まれたときには、目の病気で既に失明していました。しかし、玄庵は失明してから医学（産科学など）を学び、黒石の周辺でもつとも信頼される産科医になつていきました。すごい努力だと思います。盲目の玄庵が、わが子の雨雀を抱き、小さな手のひらに文字を書いて教えているという情景、父と子の心の深い交流の姿まで浮かんできました。

紹介したなどの作品にも、その人でなければ体験できなかつた背景があることと思います。そのような貴重な歌碑が、静かな森にひつそりと建つているのを見て、歌碑を建てた黒石の人たちの先人を偲ぶ暖かい人情に触れた気持ちになりました。ときおり、木の葉の香りのするそよ風に身をつつまれました。

活用した写真・絵図の出典

掲載 No.	内 容	出 典
No. 1	写真 澤屋家正面	澤屋加藤家略史より
No. 2	絵図 蝦夷地関係図	新編弘前市史 蝶夷地関係図より
No. 3	写真 黒石津軽家大名昇格許認状	弘前市八木橋文庫蔵より
No. 4	絵図 津軽黒石家家紋	黒石城下誌 (発行黒石神社崇敬会) より
No. 5	絵図 浅瀬石城・城下	黒石地方誌
No. 6	写真 図説仏教語大辞典 (発行東京書籍) より	(原図元和三年・一六一七、十二月作) より



参考にした本や資料

- ・わがふるさと 第二編 (発行 陸奥新報社)
- ・ひとづくり風土記 (発行 社団法人農山漁村文化協会)
- ・青森県史資料編近世3津軽後期津軽領 (発行 青森県)
- ・弘前市史通史編2近世1 (発行 弘前市企画部企画課)
- ・黒石市史通史編1古代・中世・近世 (発行 黒石市)
- ・鳥城志 (発行 安西銘次郎)
- ・妙経寺の過去帳 (編集 黒石市教育委員会文化課)
- ・津軽黒石藩史 (編集 森林助)

・浅瀬石川郷土志（発行 陸奥郷土會）

・黒石消防二〇〇年（著者 森勇一）

・黒石消防史（編者 江利山義顯）

・黒石地方誌（著者 佐藤耕次郎）

・津軽一統志（発行 青森県叢書刊行会）

・澤屋加藤家略史（発行 加藤重孝）

・青森の歴史ものがたり（発行 株式会社日本標準）

・津軽編覧日記（編集 木立要左衛門）

・浅瀬石郷土誌（発行 浅瀬石村郷土誌編纂会）

・黒石人物伝（発行 黒石市教育委員会）

・寛政重修諸家譜（編纂 江戸幕府）

・作品集「山の温泉」（著者 山形龍生）

☆ 「わたしたちの黒石」表紙の題字

☆ 表紙や文中の「切り絵」

佐藤義弘

須藤重昭

✿ 本誌制作の後援

黒石市教育委員会

(注)第六集までの記述内容についての疑問や、
お問い合わせについては下記へご連絡ください。

〒036-0405
青森県黒石市南中野字才ノ神41-9
電話 0172-54-8441
(著者:三上英治)

ふる里読本 「わたしたちの黒石」第六集
黒石の歴史と文化NO.2

編集・執筆 黒石市歴史文化専門員 三上 英治
発行 平成二十八年十一月二十五日

発行者 公益財団法人 黒石市民財団
代表理事 北山 敏光

事務局 青森県黒石市青山一二六番地二
電話 ○一七二（五三）〇一五六

印刷所 株式会社 津軽新報社
青森県黒石市前町四十八番地
電話 ○一七二（五二）三一九一

対馬 省次
